文学をいかに語るか

方法論とトポス

大浦康介編

新曜社

編者紹介

大浦康介（おおうら　やすすけ）
1951年生まれ。京都大学人文科学研究所助教授。専門・文学理論。
著書：「文学についての学問は可能か——漱石にみる文学と科学」山田慶兒・坂上孝編『人文学のアナトミー』（岩波書店），「サドが『神』を口にするとき」坂上孝編『統治技法の近代』（仮題，同文舘，近刊）ほか。

新曜社
文学をいかに語るか
方法論とトポス

初版第1刷発行　1996年7月10日　©

編　者　大浦康介
発行者　堀江　洪
発行所　株式会社 新曜社
〒101東京都千代田区神田神保町2-10多田ビル
電 話(03)3264-4973(代)・FAX(03)3239-2958

印刷　星野精版印刷　Printed in Japan
製本　イマヰ製本
ISBN4-7885-0564-9 C1090

文学をいかに語るか

方法論とトポス

大浦康介編

新曜社

序

世界でもっとも多くの愚言を耳にするのはおそらく美術館の絵だろう、というゴンクール兄弟の言葉がある。むかし初級フランス語の教科書の例文で目にしたことのある一種の警句だが、美術館の絵に代えて一篇の詩、一篇の小説と言っても同じだろう。それが愚言であるかどうかは別として、われわれは文学作品を読み、しばしばそれについて語る。

それは読後感の素朴な表明にはじまって、学校での感想文やレポート、専門家の批評、さらには学者による注釈や研究と、じつにさまざまな形をとりうる。思えば文学は、その誕生のはじめから、それについて語る言説とともに歩んできた。いや、それじたい言葉からなる文学は、そもそも文学についての言説を内に含み、また「外側」にあるこの種の言説とは不断の対話や相互浸透の関係を保ちつづけてきた。言葉とは不思議である。一篇の小説とそれについて語るわれわれの言説とは、そのいずれもが言語からなるものである以上、截然と区別することは原理的にはできない。ある種の人々にとっては歯がゆく感じられるだろうこの事実を正面から受け入れるのでなければ、それをむしろ豊かさとして享受するのでなければ、文学と戯れることの愉悦を知ることは難しいかもしれない。

なるほど文学を、それをめぐる幾多の言説をも含めて、ひとつの巨大なバベルの塔だと想像してみ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

るのも悪くない。そこで話されるさまざまな言語の混在を、相互的な無理解へとみちびく混乱ととるか、それとも無限の可能性を秘めた実験の場ととるかは考え方しだいである。「学ばせ」かつ「楽しませる」（あるいは「感動させる」）ことだけが文学の役目であるわけではない。文学はわれわれの「おしゃべり」を誘発し、それはさらに別の「おしゃべり」へと引き継がれる。この終わりのない連鎖のなかで、われわれ自身、境界の不確かな文学の磁場にあること、われわれもまた、われわれなりの仕方で「文学している」こと、このことに自覚的であるべきだ。文学は侵すべからざる聖域ではない。縦横に走り回り、寝そべったり、落書きしたり、好きな色を塗りたくったりしていいのだ。遠慮はいらないのである。

本書でもあつかわれているパスティーシュ（模作）などは、まさに文学の内と外とにまたがる言語実践だと言えるだろう。それじたい作品であると同時に他作品の（というより他作家の文体の）ユニークな批評でもあるからである。しかしパスティーシュにせよパロディーにせよ、この種の言語実践が根本において明らかにするのは、創造になるとされる文学作品そのものがすでに、断片的にまた無意識的にであるにせよ、他作品のなんらかの書き直し（リライティング）だということである。いわば「本歌どり」は文学の常套だということだ。言語とは独自の層をもち奥行きをもつ「立体」である。文学と相対するときほどこのことを思い知らされることはない。そして文学にかかわるということは、それが読書であれ「おしゃべり」であれ研究であれ、みずからこの立体的言語世界のなかに身を投じるということにほかならない。

文学をいかに語るか。

文学を語る決まったやり方があるわけではない。何をどのように論じようと自由である。ただ、文学はこれまで実際にさまざまな仕方で語られてきたし、それはしばしば大学やジャーナリズムといった「制度」と深くかかわるかたちでなされてきた。批評は多少なりとも批評についての理論を含む。批評や文学研究が学問的体裁を帯びるなかで、方法論そのもの、つまり「いかに語るか」という問いじたいもまた考究の対象となったことは必然的だったと言える。本書第一部〈方法論〉は、文学研究のいくつかのディシプリン、批評の方法論、「何々主義」と呼ばれるアプローチの歴史的推移などをあつかっている。もとより網羅的ではないが、批評や研究のあり方についての議論をパノラマ的に概観したものである。

第二部〈トポス〉は、研究の具体例を集めたものである。それぞれが「いかに語るか」にたいする解答の試みだと言ってもいい。第一部が理論編だとするなら、第二部はいわば実践編である（ただ「実践」じたいもしばしば理論的である）。文学はわれわれの想像をはるかに超えた複合体であり、それにはさまざまな「切り口」が可能である。それを議論の成立する場（トポス）と考えることもできる。ごく大ざっぱに言って、ジャンル（ないしはそれに準ずる区分）や言説のタイプという枠で文学をとらえたのが「フィクション」、「生の記述」、「幻想」、「冒険もの」、「パスティーシュ」といった項目である。「生の記述」は実質的には伝記、回想録、自伝、日記という言説を論じたものだし、「幻想」と「冒険もの」はそれぞれ幻想小説と冒険小説というサブジャンルの諸様態を対象としている。「フィクション」も含めて、これらの依拠する分類が大まかにテーマ的であるのにたいして（ただし

語りの構造といった形式面との関係も看過されてはいない)、「パスティーシュ」は文体的技法によって定義されるいわば準文学的言説をあつかっている。

ジャンル的な枠で囲うことなしに、個々のトポス、すなわち言語上の技法、特定のテーマ、鍵概念などをそのものとして問題にしている項目もある。「曖昧と意味の揺らぎ」は詩の言語の重要な一側面を分析したものである。「遊び」は文学における言語遊戯のありようを、また「固有名詞」はこの品詞の選択が小説作法に占める位置を論じている。「襞」は頻出する特権的イメージ群の文学的かつメタ文学的ディメンションに注目した論考である。「ミメーシス」と「プリミティヴィスム」は、文学や美学でしばしば取り上げられる表象の問題にかかわるキー・タームを検討したものだ。このほか、「話」という語のルーツから小説言語の近代を問う「ハナシ」、作家がみずから自己の作品の制作方法に言及している言説をあつかった「自作語り」がある。

以上はしかしながらあくまで一面的な説明にすぎない。項目のなかには論述中心のものもあれば、特定作家の作品分析が大きな比重を占めているものもある。通時的(歴史的)な考察もあれば、共時的なものもある。言及されている作家や理論家の属する国あるいは文化圏も、時代もさまざまである。各項目は多様なファクターをかかえており、項目相互の関係をきれいに整理することなどできそうもない。第二部における項目の並べ方も厳密な原則にのっとっているわけではない。第一部も含めて、読者は興味と「ひらめき」にまかせて、順序など気にせずに自由に読めばいいのである。文学に秩序という言葉は似合わない。

ただ、執筆者の大半の専門から、論及の対象や参照される文献などがかなりフランス文学関係に偏

ったことは否めない。いや問題設定あるいは議論の枠組みそのものが、仏文系の研究者の関心を多分に反映するものとなったかもしれない。これは、部分をもって全体を語るという過ちさえ犯さなければ、それじたい別に悪いことではない。この種の書物、とくに翻訳書には、むしろ英米圏の文学の専門家による（あるいは少なくとも英米圏の理論的動向を反映する）ものが多いように感じられるが、それが事実だとしたら、本書はバランスをとることに少しは貢献できるかもしれない。いずれにしても、機会があるならば、読者諸氏のご教示も得て、本書を出発点としつつ射程をいっそう広げてゆきたいと考えている。

巻末に「参考文献リスト」を付けた。これも選択的なものでしかないが、読書の一助となれば幸いである。

本書ができるだけ多くの「おしゃべり」の種を蒔いてくれることを願っている。

一九九六年五月

編　者

文学をいかに語るか——目次

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

序……3

I　方法論

文学理論……大浦康介　14
テクスト生成論……吉田　城　52
ナラトロジー……田口紀子　69
文学史……多賀　茂　91
精神分析批評……山田広昭　110
テーマ批評……山路龍天　123
文学社会学……小倉孝誠　148
「よみ」の理論と読者論……宇佐美斉　167
ロシア・フォルマリズムと構造主義……北岡誠司　185
ニュー・クリティシズム……斎藤兆史　208
ポスト構造主義とフェミニズム批評……小山俊輔　220

II　トポス

フィクション……大浦康介　240
生の記述——伝記・回想録・自伝・日記……小倉孝誠　270
ミメーシス……小西嘉幸　289
曖昧と意味の揺らぎ……宇佐美斉　315
パスティーシュ……吉田城　332
遊び……酒詰治男　347
固有名詞……山路龍天　366
襞……山田広昭　396
幻想……田口紀子　414
冒険もの……齋藤希史　431
ハナシ……小山俊輔　446
自作語り……鈴木啓司　464

プリミティヴィスム……丹治恒次郎 483
あとがき……505
参考文献リスト……507
人名索引……556
事項索引……560

装幀——加藤光太郎

I

方法論

文学理論 *théorie littéraire / literary theory*

大浦 康介

文学理論とは文字どおり文学についての理論のことである。しかしこう言っただけでは、ほとんど何も言わないにひとしい。それにそもそも「文学」と「理論」という二語の組合わせには、「良識」ある文学愛好家の眉をひそめさせずにはおかない、ある違和感がともなうかもしれない。具体性を生命とする文学、豊饒なイメージの宝庫であるはずの文学に、抽象的な議論はいかにもそぐわないと考えられるかもしれないからだ。そこまでは言わないにしても、少なくとも、一篇の詩や小説を味読するといういわば原点から見れば、「文学理論」など遠い世界の、またかなり疎ましい営為に映るだろうとは想像できる。

しかし今日、文学にかかわる発言や出版物に「文学理論」という言葉を見出すことは稀ではない。数年前に話題になったテリー・イーグルトンの本の邦題は『文学とは何か――現代批評理論への招待』だが、その原題は『文学理論 Literary Theory』（一九八三年）である（ちなみに「文学とは何か」は序文のタイトルである）。イーグルトンによれば、ロシア・フォルマリズムも受容理論も文学理論である。またそれらをあつかう理論的言説（いわば理論についての理論）も文学理論だというこ

とになろう。イーグルトンはとくにこの語の定義を行なっているわけではないが、それだけにいっそう、こうした用法がいわば当たり前のものとして通用しうる知的環境があるということがうかがわれる。この用法に従うならば、本書第一部で取り上げられている幾つかのスクール（流派あるいは学派）やアプローチのそれぞれも、さらには本書全体も広い意味で文学理論だということになる。

1　文学理論とはなにか

なるほど一般に英米圏では、「文学理論」という言葉は、一種の新語として、きわめて広い意味に使われているように見受けられる。[1] ただそこには幾つかの意味の層が看取されることも事実である。ひとつには、この語が「批評理論 critical theory」という語とほぼ同義に用いられているということがある（イーグルトンの本の邦訳の副題もこのことに呼応している）。批評それじたいに対する、批評の原理を問うもの、「批評はいかにあるべきか」を考えるものとしての批評理論ということである。[2] ニュー・クリティシズムなどはその好い例だろう。もともと英米圏では思弁的・観念論的議論が敬遠されがちであったため、理論といえば畢竟、まずは批評のメソッドに関するものであったということなのかもしれない。もちろん、よく言われる文学教育との絡み（教えやすさ、実効性など）もあるだろう。

一方、おそらくは批評の概念そのものの拡大もあって、「文学理論」は今日、とくにアメリカでは、文学にかんする反省的で革新的な理論のすべてを指すにいたったようである。いやそこでは、いわゆ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com